

## 日本の詩を真に世界に発信し続ける人

郡山直詩集『詩人の引力』に寄せて

も作り世界に発信したいと心密かに考えていた。そんな時に水崎さんから電話があったので、何か眼に見えない力が原爆詩集の製作に結集してくる予感があったのだ。水崎さんにはまだ正式には言えないが来年早々には具体的なプランが出来てくると思うので、私たちの原爆詩集の英語版に合流して欲しいと伝えたのだ。

1  
郡山直さんは奄美諸島の喜界島出身の英文学者であり、戦後間もないころから留学先の米国で英語詩の実作を開始し、多くの英文詩を海外の新聞や教科書にも掲載されている詩人だ。郡山さんは東洋大学の名誉教授であり長年にわたり英文学や英語を教えてきたが、そんな日英のバイリンガルの詩人である存在を私は二〇〇六年の暮れまで知ることはなかった。同じ英文学者で詩人の水崎野里子さんから英語版の原爆詩集を作りたいので協力してくれないかと相談があった。水崎さんは郡山直さんと二人でそのような企画を考えているので、原爆詩集の編集やそのコンテンツ作り、出版を含めて協力して欲しいとのことだった。私はその話を聞いて不思議な思いにとらわれた。なぜなら私と長津功三良さんは、本格的な原爆詩のアンソロジーを二〇〇七年の夏に刊行するために数年前から下準備をしていたからだ。まだ正式にコールサック社に決まってはいないが、初めに長津さんが私の前に打診していた出版社が辞退するのを待って二〇〇七年の春には公募を開始する手はずだった。私は日本語版だけでなく英語版

二〇〇七年初めに詩人たちの集る新年会で、私はリストに郡山さんの名があることを見つけて初めて名刺交換をして言葉を交わした。挨拶程度の立ち話であったが、私は郡山さんに原爆詩集英語版の中心人物になるモチベーションの高さを感じた。その後私と長津功三良さんと山本十四尾さんの三人が編者となり、日本語版の初校が五月の半ば過ぎには出来上がり、上野で初校を手渡し経過報告の集まりを持った。三人の編者の他に翻訳者の郡山さんや水崎さんにも来てもらった。その席で日本語版が七月上旬に刷り上がり、一斉に新聞社などのマスコミや著者などに送り、全国の書店にも配本できるように手配することを伝えた。そして郡山さんたちが中心になり翻訳チームを作り十一月中旬には英語版を校了し印刷にまわすことを確認しあった。郡山さんには御庄博実さんの序文や峠三吉や原民喜など、原爆詩の初期の古典的な名詩篇をお願いすることになった。そして日本語版が出て天声人語や六十もの新聞などに紹介されて大きな話題になっていたころ、郡山さん、水崎さん、結城文さん、大山真善美さんの

四人は黙々と毎日翻訳を続けてくれたのだった。そして計画通りに十月にはほぼ翻訳を終えてネイティブチェックに回すことが出来た。その翻訳のリーダーシップをとった郡山直さんは、毎日ノルマを決めて着実に翻訳を進めてくれた。実は私は日本語を英語に翻訳をする本格的な本は初めて制作するので不安な面もあったが、郡山さんのユーモアがあり飄々とした姿は、自信に満ち溢れていて本当に頼もしかった。郡山さんたちに任せておけばきつとうまくいくと確信した。そしてその通りに実現されたのだ。日本人の戦争の悲劇を世界中に発信するという使命感を秘めて、淡々と息の長い翻訳業務をこなしていく持続力や勤勉力を体現している郡山さんに、私は深い畏敬の念を抱いたのだった。

2

お会いしてからしばらくして郡山さんから英語の詩集『POEMS ABOUT THE IRAQ WAR AND OTHER POEMS』(『詩集 イラク戦争・その他』)をいただいた。難しそうだと思いながら頁を開け、七十九の詩篇を読み始めると英語力のない私であっても抵抗感なく読み始めることが出来たのだ。シンプルな英語にとっても繊細で身近な思いから発して、イラク戦争を引き起こしたアメリカへのイラク民衆の怒りが乗り移っていた。また自らの暮らしの場も自然に詩の中で紹介しながら、詩が生まれてくる生活を読むものを感じさせる

詩群であった。英語の詩であっても日本人の心であり世界中の人々の心に繋がっていきける表現を目指していくことが可能であることを示していた。この英文詩集の中で最も気に入っていて、今回の詩集にも収録されている詩「今夜は月が泣いている」を引用したい。

### TONIGHT THE MOON IS CRYING

Tonight,  
the night of October 10, 2003,  
the moon seems to be crying,  
covered by vapor.

The moon must be crying  
for all those killed and maimed  
by the American bombs  
in the foolish war  
started by President Bush.  
Many human beings,  
not only US soldiers, British soldiers, Australian soldiers,  
but also many innocent Iraqi civilians,  
children, women, aged folk,  
United Nations officials,  
Iraqi policemen too

lost their lives  
in this foolish war  
started by President Bush.  
Who will take care of the Iraqi boy  
who lost both his arms?  
Who will feed him?  
Who will help him excrete  
and wipe his arse?  
What does Rumsfeld think of the Iraqi boy  
whose body was buried in a shallow grave  
and dug up and eaten  
by a stray dog?  
The Iraq War is a wrong war.  
Who will put an end to the mess the war has brought  
about?  
The Iraq War is the saddest war  
in human history.

今夜は月が泣いてる

今夜

二〇〇三年十月十日の夜

月は霞に隠れて

泣いているように見える  
ブッシュ大統領が始めたこの愚かな戦争で  
殺され傷つけられた人々のために  
月は泣いているのだ  
多くの人間

アメリカ、イギリス、オーストラリアの兵隊だけでなく  
多くのイラク市民、  
子供たち、女性たち、老人たち、  
国連職員、

イラク警察官たちも  
ブッシュ大統領が始めた

この愚かな戦争で

命を失ってしまった

両腕を失ったイラクの少年の世話は

誰がするのか

誰が彼に食事を与えるのか

誰が彼の排泄を手伝い

尻を拭くのか

死んで浅い墓に埋められて

野良犬に掘り起こされて

食べられたイラク少年のことを

ラムスフェルド国防長官はどう考えているのか

この戦争は間違った戦争だったのだ

この戦争がもたらした混乱を誰が始末するのか  
イラク戦争は  
人類の歴史のなかで  
もっとも悲しい戦争だ

この詩集は二〇〇四年八月十五日に発行された。どんなにか郡山さんはアメリカ政府の犯したイラクの民衆を省みることなく大義のない戦争について憤っていたのかが伝わってくる。この詩は、日本を含めた国家という狭い視野から発せられたのではない。郡山さんの反戦詩は単純な正義感から書かれたものではない。宇宙に仮に生あるものを創り出した神がいるなら、そのような聖なる存在が、イラクの両手をもぎ取られた少年や、遺体を野良犬に食べられた少年たちのために涙を流していると語っている。郡山さんにかかると月の光は、愚かな人間たちの行為を暗闇の中から明るみに出してしまう。読むものに「本当のことを言えばおまえたちはアメリカの言いなりで加担していたのではないか。イラクの少年の腕をもぎとり、少年の遺体を食っている野良犬のような罪深い共犯者なのだ」と自らの姿勢が問われてくるのだ。この詩を含めた英文詩集は、インターネットで世界中の心ある人たちの間で話題になり今も読まれていると聞いている。これほど激烈にアメリカの引き起こした戦争犯罪を糾弾した詩でありながら、非戦闘員であるイラクの子供たちの悲しみを書き記

した詩はなかったらう。シンプルな英語が韻を踏むような畳み込むリズムを伴い、固有名の入ったリアリズムの反戦詩でありながら、同時に人類の存在を問う形而上的な詩とも言える拡がりや深みを抱えた詩なのだ。「両腕を失ったイラクの少年の世話は／誰がするのか／誰が彼に食事を与えるのか／誰が彼の排泄を手伝い／尻を拭くのか」という問いに読むものは、答える場に立たせられるのだ。その意味でこの「今夜は月が泣いている」は、二十一世紀初頭の人類史を刻んだ名詩だと私には考えられる。私は日本語の詩の評論を書いてきたが、郡山さんのような本格的なバイリンガルの詩人たちの世界に詩を発信している現実的な試みを評価することを怠ってきたことを痛感させられたのだ。郡山さんは人類の危機を感じながら世界市民の観点で英語を活用しながら最も切実なテーマを詩作していたことは間違いない事実なのである。私を含め日本語でしか詩を書かない日本の詩人たちはこの事実を当たり前のこととして認識しなければならないだろう。

3

今まで郡山さんは英語の詩集は出してきたが日本語の詩集を出したことはなかった。郡山さんからイラク戦争の反戦短歌集の相談を受けた時に、私はオバマ政権になり状況も変わってきたこともあり、それよりも郡山さん自身の日本語詩集を勧めた。英語の詩集や「コールサック」に寄稿された詩群

を読んでいたこともあり、前から郡山さんの詩篇を多くの日本人に紹介したいと願っていたからだ。また郡山さんを敬愛し高く評価している同じバイリンガル詩人の堀内利美さんからも、同じ頃に郡山さんに詩集を勧めて欲しいとの推薦があった。そのような経緯を辿って今回の詩集は郡山さんにとって初めての日本語詩集が実現したのだった。何百篇もの中から百篇ほど翻訳したのから、六十六篇を五章に分けて編集された。一章「詩のパン」十四篇は郡山さんのなぜ詩を書くのかという問いに答えた詩篇だ。二章「詩人の引力」十三篇は詩人が夜空を眺めながら時間や空間に神秘を感じる宇宙観などを書き上げている。三章「僕のお祖父さん」十二篇は故郷の奄美諸島の喜界島の自然や親族などを想起した郡山さんの根底にある詩群だ。四章「飛行機の影」十七篇は様々の場所で生きた動物を含めた他者たち、また人間が作り出した飛行機などの存在物に感じた驚きを書き記した詩群だ。第五章「今夜は月が泣いている」九篇はアメリカが引き起こしたイラク戦争など現代の戦争の悲劇を激烈に告発しながらも人間存在の現在にも触れていく詩群だ。

一章「詩のパン」の十二篇は、分かりやすい詩想であるが実は突き詰められた強靱な詩論だ。きつと郡山さんはいつも詩想が湧き出ていて、いかに分かりやすくその詩想を詩に変換できるかを考えているのだろう。詩想の魅力を世界にいか

に詩に宿すかにエネルギーを注いできたのだろう。郡山さん  
この短詩に示された詩想は、詩という存在が人間の生きる  
上での重要な食料と同じ価値あるものであると告げている。  
牛乳を飲んだり料理に使用したりするものたちは、生産者で  
ある乳搾りの娘を忘れては、その食料を産み出す行為は  
尊いものである。同様に詩も人間にとって心や精神の活力の  
基になる食料のようなものであることを八行の詩によって明  
らかにしている。たった八行の詩で詩の本質を誰にでも分か  
るように魅力的に語ることが郡山さんには可能なのだ。現代  
詩が難しいと固定観念を抱かせてしまっている現状を変えて  
いく力が郡山さんの詩にはあり、日本語でしか詩作していな  
い詩人たちに郡山さんの詩論的な詩作はきつと大きな刺激を  
与えるだろう。次に一章のタイトル詩「詩のパン」も読んで  
みたい。

## 詩のパン

経験という粉と

インスピレーションという酵母菌を

混ぜて

愛情をこめて

よくこねなさい

それから 力いっぱい たたいて

しばらく放っておきなさい

にとつての詩想は、人が孤立していく言葉ではなく、孤立し  
た言葉を抱えた人間たちが吸い寄せられてくる引力のような  
言葉が中心に目差されているのだろう。その意味で郡山さん  
にとつて英語という言語は、現状において詩想を伝えるため  
に最適な言語ではあつたのだろうが、絶対的な言語ではない。  
その根底には世界共通な詩的精神や詩的言語があると考えて  
いるに違いない。それゆえに日本語であつても他の言語であ  
つても、詩にあらゆる存在のエネルギーが結集してくる「詩  
の引力」のような言葉を目差すのであればいいのだと考えて  
いるのだろう。一章「詩のパン」の冒頭の詩を引用してみる。

乳搾りの娘のように

牛の

乳房から

牛乳を搾る

乳搾り娘のように

詩人は

かれの寂しい部屋で

心のなかから

詩の滴を搾りとる

それが自分の内部からの力で  
大きく、ふくらんでくるまで……

それから 再びこねおして

丸い形にして

あなたのハートの

オーヴンで

焼きなさい

これも詩作をパン作りになぞらえながら物語る愉快な詩で  
ある。この詩なら子供が読んでも詩を読むことが楽しくな  
り、詩を作りたくなる。なぜ郡山さんはこのようなしなやか  
な詩が書けるのか。それは郡山さんが民衆の暮らしの中にい  
つも詩的な行為を発見し、そこから詩作を学ぼうと欲してい  
るからだろう。民衆の暮らしの反復の中に人を生かすための  
インスピレーションを発見し、それを想像力で膨らまし励ま  
しを与える詩なのだ。人生経験とインスピレーションという  
未来への洞察、それらを熱いハートで焼き上げるといふ職人  
芸が詩作に要求されている。このように詩作の楽しさや基本  
を誰にでも分かる日本語と英語で書くことが出来る郡山さん  
は、最良の詩のレスンプロでありプレイニングマネージャー  
のような存在だと思われてくる。日本の現代詩を書く詩人  
たちは、暗喩を駆使してテーマを隠すことが詩の価値のよう  
な倒錯の袋小路に入ってしまったが、郡山さんのようなバイ

リンガル詩人は、英語でも日本語でもその瞬間に伝わらなければ価値がないという真剣な場面で言葉が発しているにちがいない。だからシンプルな言葉で仮に比喩を使う場合であっても、誰もがわかるように、しかも突き詰められた斬新さであり、換喩的で隣接するものから他者の経験を通して伝えようと努力していることが痛いほど分かるのだ。郡山さんの詩篇を読んでいて、二十一世紀に日本の詩人が世界に本格的に活躍する詩人たちが出現するためには、郡山さんの詩作や生き方から多くのことを学べると私は考えている。

#### 4

それから郡山さんほど故郷を愛する詩人はいないことも付け加えておきたい。郡山さんは二〇〇七年十一月十七日に東洋大学で開催した『原爆詩一八一人集』出版記念会の二次会の交流会で奄美の踊りを披露してくれた。その踊りを私は初めて見たが、なぜか心が温かくなり身体の血の巡りがよくなって、一緒に踊りたくなるのだった。真にグローバルな人は、ローカルの伝統を身体に沁み込ませていて、その価値を自らのものとしているのだ。郡山さんは溢れ出るように身体から喜びを表現する奄美の踊りを踊りだす。その舞踏の垣塙の中に見るものを引き込んでしまう。薩摩藩、日本政府、アメリカ駐留軍などの侵略統治に翻弄されてきた沖縄島・奄美大島・喜界島などの不屈の民衆のエネルギーが吹き出てくる

いる。

#### 僕のお祖父さん

島で満九十四歳まで生きた  
僕のお祖父さん  
肩幅は広く  
腕は太く、強かった、お祖父さん  
焼けつくような島の太陽の下で  
日焼けした上半身を裸にし  
岡の上の  
小さい、石ころだらけの固い畑を  
馬を使って耕したお祖父さん  
台風の暴力も  
悲しい家族の者の若死にも  
彼の精神を打ち負かすことはできなかった  
彼はもう  
三十年以上も岡の麓の  
家族の墓に休んでいる

しかし、彼は肉の無い脚で急に立ち上がり  
地団太ふんで  
骨だけの腕を振り上げ

ようだった。その肉体化された詩想が踊りとなって、原爆詩を書き継いできた多くの詩人たちが広島・長崎の死者たちを慰霊し死者たちの命を語り継ぐ場を、あつという間に死者たちを蘇らせるような祝祭の場に変えてしまったのだ。英語版の翻訳者のリーダーの郡山さんが祝祭の化身のように踊り続けて、周りの詩人たちも見様見真似で伝播されてしまったのだ。それはまさに詩の引力ともいえる有無を言わせぬ詩的なパワーのなせる業だった。

最後に詩「僕のお祖父さん」を引用してこの小論を終えたい。『原爆詩一八一人集』や『大空襲三二〇人詩集』のことで多くの新聞記者の方から質問される前に、「私は谷川俊太郎ぐらいしか読んだことがあります」という意味のことをお聞きする。それを受けて私は現代の日本の詩人を語る際に谷川俊太郎さんから語る必要はないし、谷川さんが日本を代表する真の詩人ではないし、特別に優れた詩人ではないと答えている。そしてもつと世界に発信したい詩人はたくさんいると私の考えを伝えている。私が評価するのは日本人の歴史的な苦悩や喜びの全体像を背負って書き続けてきた詩人たちで、そのような詩人は多数存在する。例えば浜田知章、関根弘、鳴海英吉、嵯峨信之、木島始、宗左近、御庄博実、大崎二郎、石川逸子などだ。その中に郡山直の名を私は加えることになるだろうと考えている。その意味で世界に日本の詩を発信しようと考えてる人々には郡山さんの詩をぜひ読んでもらいたいと願って

歯の無い顎を食い縛り  
黒い眼の穴の奥から  
僕を睨みつけ  
カンカンになって怒り  
舌の無い口で  
怒鳴りつけ、ツバを吐きかけるだろう  
僕が人間を恐れ、風を恐れ、霰を恐れ  
世間の すみっこを  
臆病な野兎のように  
こそそ歩いているのを見たら

郡山さんはいつも喜界島で農作業をしていたお祖父さんの視線を抱えているのではないか。「僕が人間を恐れ、風を恐れ、霰を恐れ／世間の すみっこを／臆病な野兎のように／こそそ歩いているのを見たら」、いつでも「怒鳴りつけ、ツバを吐きかけるだろう」厳しくも愛情ある神のような存在を決して忘れることがないのだ。その視線の魅力が「詩の引力」となって私たちを引き寄せて、詩の醍醐味を与え続けてくれるのだろう。